シネマ女性学

認知症への“コロンブスの卵”

松本 侑壬子・ジャーナリスト

認知症（主にアルツハイマー病）は、昔から「呆（ぼ）け」といって老化の象徴のように考えられてきた。かかるともう人格が変わってしまう、自分が自分でなくなってしまう、「呆けたらお終い」と、秘かに怖れている人も多いのでは？

このドキュメンタリー（長編動画）は、そういう風潮に対してまさにコロンブスの卵。課題はまだあるにしろ、ここまで研究は進み、患者を取り巻く環境や家族の問題は拓かれてきたのか、と驚きかつ励まされる。これは、関口監督がアルツハイマー病になった母親宏子さんにカメラを向けて、２年半にわたり毎日その姿を密着撮影した生活記録である。母親本人ばかりではなく、監督自身、妹一家、おばあちゃんが大好きな男女の孫２人、さらに長寿医療や精神医学の専門医、福祉関係者ら宏子さんを取り巻く人々とのかかわりもしっかりと描かれている。

関口監督は、日本の大学を出てオーストラリアに留学時に映画監督となり、「戦場の女たち」「THE ダイエット」など長編記録映画３本はいずれも国際映画祭で受賞。カメラを向け、４作目の本作は、29 年ぶりに帰国後すぐに母親に「娘半分、監督半分」の目線でタイトル通り母宏子さんの日常生活を赤裸々に描いている。

“赤裸々なアルツハイマー生活”とは、どんなものか？ 怖るるなかれ！これが（予想を裏切り）明るいのだ。ユーモアと優しさに包まれた、屈託のない暮らしぶりなのだ。例えば、家族みんなで宏子さんの 79 歳の誕生祝いをする。ケーキにロウソクを立て、ハッピーバースデーを全員で歌う。その翌日には宏子さんはそのことをすっかり忘れている。「おばあちゃん、忘れちゃったの？」と孫に聞かれて、宏子さんは「忘れた、忘れた～」と節を付けて歌いだす。みんなで「あははは」と笑う。そうか、忘れれば、もう一度繰り返して話しかければいいのか。大事なモノをどこに置いたかわからなくなれば、一緒に困り、一緒に探せばいいではないか―そんな気がしてくる。もちろん、穏やかなときばかりではない。機嫌が悪くなったり、ちょっと困った行動をするときもあるが、監督はそのままの宏子さんを受け入れ、カメラを回し続ける。

関口監督は、オーストラリアで結婚、１人息子の先人君を、離婚した元夫の下に残して帰国した。学校の休みに日豪を往来する先人君はおばあちゃんが大好き。元夫もときどきやって来る。宏子さんは娘一家の家庭事情を十分にわきまえて家族それぞれへの細やかな気配りを忘れない。まさに「どこがアルツハイマー？」と思えるほど。

映画の中で新井平伊（へいい）順天堂大学大学院教授（精神・行動科学）は、「軽・中度のアルツハイマー病は、脳の機能の 95％は正常。障害は５％程度」だと言う。つまり、瞬間瞬間は適切で正しい行動ができるが、５分、10 分経つと記憶がリセットされてしまう。そのため、「記憶や判断に障害は出るが、その人本来の性格や思考は、病気になってもかなり進行するまではもち続ける」と言う。進行は軽度から高度まで 15 年～ 20 年とも。

映画と同時に出版された同名の本（パド・ウィメンズ・オフィス刊）には、新井教授や長寿医療の権威・遠藤英俊医師（国立長寿医療研究センター）による詳しい解説も収録している。本作の劇場および自主上映の問い合せは、シグロ（電話 03-5343-3101）まで。

『毎日がアルツハイマー』

長編動画（93 分）／関口祐加監督

公開中

© 2012 NY GALS FILMS